

東邦大学学術リポジトリ



OPAC

東邦大学メディアセンター

タイトル	宮ニ修一教授送別の辞
別タイトル	Ferewell Professor Shuichi Miyazaki
作成者（著者）	館田, 一博
公開者	東邦大学医学会
発行日	2016.03
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 63(1). p.15 15.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	退任記念
著者版フラグ	publisher
JaLCDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2016.r011
メタデータのURL	https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD30171800

宮崎修一教授送別の辞

館田 一博

東邦大学医学部微生物・感染症学講座教授

宮崎修一教授は、1978（昭和53）年4月東邦大学医学部微生物学講座に助手として着任され、38年間にわたり教育・研究にご尽力されて来ました。当時は日本が誇る抗菌薬開発の繚乱期でもあり、微生物学講座は五島瑳智子教授（故人）のもとで、新規抗菌薬評価の中心的役割を果たされました。製薬会社からも多くの研究者が微生物学講座の研究生となり、各会社の開発した抗菌薬の評価で教室は活気に満ち溢れていました。

そのような中、赴任された宮崎先生は、持ち前の親分肌で瞬く間に研究生を引っ張るリーダー的存在となり、先陣を切って抗菌薬の有効性研究に打ち込まれ、多くの新規抗菌薬を市場に送り出す縁の下での力持ち的役割を果たされました。今でも当時の研究生仲間が集まり、宮崎先生を囲む会が行われていると聞いています。まさに先生のご人徳によるものと思われまます。

先生は大阪府立大学大学院農学研究科獣医学専攻博士課程において、既に獣医学博士号を取得されておりましたが、1985（昭和60）年に医学博士号も取得され、翌1986（昭和61）年に講師に昇任されました。そして同年9月、米国フィラデルフィアにある Thomas Jefferson University に1年間留学されました。

また先生は、新規抗菌薬評価をリードしていく一方で、感染症学の基礎研究に対し多大な貢献をされて来ました。1987（昭和62）年には「実験的混合感染における感染菌力の変動と解析」の研究テーマで、日本感染症学会の伝統ある学会賞「第32回二木賞」を受賞されています。先生は長きにわたる研究生生活の中で、一貫して小児敗血症や成人の慢性呼吸器感染症の主要原因菌種の1つであるインフルエンザ桿菌の研究をされて来ました。多くの論文を書かれています。なかでも最も重要な研究は、インフルエンザ桿菌の実際の病態に近い気管支肺炎マウス実験感染モデルを

確立したことです。その後この感染モデルを利用した抗菌薬の有効性評価が多くなされ、感染症コントロールに多大な寄与をされたことは先生の大きな業績と考えております。その業績にもより先生は1997（平成9）年に医学部微生物学講座（当時）（山口恵三教授）の助教授（現准教授）に昇任され、さらにこの研究が大きく評価されて、1998（平成10）年に第57回東邦医学会賞を受賞されました。

先生はまた先端医科学研究センターの設立に大変ご尽力され、その御功績もあり2010（平成22）年に微生物・感染症学講座准教授から、東邦大学大学院医学研究科先端医科学研究センター教授（先端医科学研究センター長兼任）に推挙され就任されました。その後同研究センターにおいて、現在多くの大学院生の活発な研究が行われており、優秀な研究成果が生まれています。加えて学生部委員会委員、ハイテクリサーチ委員会委員長、遺伝子組換え委員会委員、動物実験委員会委員長、病原体等安全管理委員会委員長、3委員会連絡会議議長、バイオセーフティ委員会委員長、実験動物センター管理責任者、総合研究部副部長等々を歴任され、本大学医学部に多くの貢献をされています。

更に日本感染症学会評議員、日本環境感染症学会評議員、日本化学療法学会評議員、日本臨床腸内微生物学会評議員など多くの学会でのさまざまな役職をこなされ、学会活動において重要な役割を果たされました。

先生は、大学時代には応援団に所属されていたと聞いております。先生が研究仲間を大切にされ、後輩から慕われ、また前述のように研究生OBたちが囲む会を続けているのは、先生が応援団気質で彼らを叱咤激励しつつも、心から応援されてきたことが反映されているのではないのでしょうか。

38年間本当にお疲れ様でした。そしてありがとうございました。定年後も、私たちをその温かく熱い mind で応援してください。